

序

うつ病は誰が診る病気かを議論することはここでは差し控えますが、現実にはうつ病の患者さんが最初に受診する診療科は内科、婦人科、整形外科などの一般科が圧倒的に多いことが知られています。これは患者さんの意向であり、医学的・医療的に「それがベスト」であることを意味している訳ではありません。なぜなら、一般科の医師がうつ病患者さんを診て、うつ病と診断する率はたかだか30%程度です。その結果、うつ病の早期発見は遅れ、治療が後手にまわる、あるいは難治化につながる危険性が高まります。昨今、ますますうつ病は増加傾向にあります。WHOの報告では現在、世界には3億2,200万人のうつ病患者さんがいるといます。過去10年の間に18%増加しているそうです。わが国でも300万人以上のうつ病患者さんがいるとされ、実際に治療を受けているのは100万人程度です。

うつ病の治療の原則は、早期発見、早期治療です。一般科で見逃されたうつ病患者さんが、精神科あるいは心療内科にたどりつくまでには半年も1年もかかることが稀ではありません。これまでも、プライマリケア医のためのうつ病啓発を目的にした医学雑誌の特集やモノグラフは数多く出版されてきました。しかし、うつ病の早期発見はまだまだの感があります。

ここで本書を贈る目的のひとつは、一般科の医師に改めて「うつ病」の基本的な情報を届け、早期にうつ病に対処するための一般科医と精神科医の連携を深めることにあります。そして第二の目的は、第一線でうつ病診療にあたっているメンタルクリニック、心療内科クリニックの若手の医師にわが国のうつ病医療の現状を知ってもらい、専門家としての医療水準を平準化することに役立てていただくことにあります。本書は5つの章立てから構成されています。このうち「Ⅰ. うつ病を知る」、「Ⅱ. 診断のコツ」、「Ⅲ. 治療のコツ」の前半(1. うつ病治療の基本原則、2. うつ病の薬物療法の基本)は主に一般科の医師を意識して書かれたもので、うつ病医療の基本、入り口に関する理解を深めるのに役立つと思われます。これに対して「Ⅲ. 治療のコツ」の後半(3. 抗うつ薬の種類と使い方、4. うつ病で使用される薬)、「Ⅳ. 社会復帰に向けて」、「Ⅴ. ライフステージ別のうつ病の特徴」はどちらかといえばメンタルクリニックや心療内科クリニックの医師向けに書かれたものです。

本書がうつ病の早期診断・治療に役立てられ、うつ病への気づきが進み、治療の遅れの回避につながることを期待しています。

2017年12月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター名誉理事長
一般社団法人 日本うつ病センター理事長

樋口 輝彦